



研究の価値

池田悦治*

この頃よく80年代と云う言葉を聞くがふり返って見れば、わたくしもしばしば口にする。

自然科学の驚異的な発達から地球資源が、極大に利用されて、このまま推移していくと、人類は、余り遠くない年代に現在のような豊かな物的生活を営むことができなくなるだろう。今こそ「かけがえのない地球」資源を大切に、その利用について根本的な見直しが必要である。

80年代は量より質、物より価値の時代とされている。われわれは、最早や地球資源をどう利用するかよりも、どうしてそれに代え、如何にこれを省くことができるかに力点を置かねばならない。

考えて見れば、長い年月をかけて、利用し得る資源の探索発見に力を尽してきたわれわれは、今も尚、未開発の地球領域にこれを追い求めているが、このことがこれからの人類文化に役立つことは確かだと思う。自然科学が謳歌されるのは当然とっていい。

翻って自然科学は、一方に高邁な未踏技術の開発を求めながら、一方には、極く当り前

の生活周辺技術開発のための研究を進めている。

当協会が取組んできた水処理研究会は、昨年で9回を数えた。そのときそのときの社会の要請をふまえて、これを学究に受け、その研究成果を社会に及ぼして高い評価を得ている。

一見平凡とも見られる水処理研究が、80年代に应运、次第に虫ばまれつつある地球をして、再び生命の絶対楽園たらしめてくれることの役割は極めて大きい。

最早や科学から逃れて生活することのできなくなった人類である。水処理研究の如き生存環境に係わる課題処理がどんなに尊いことか。しかも研究は、進めば進む程、そして一つのことが解明されると直ぐに、その後を追うようにして、更にもう一つの新しい課題が立ち塞がっている。研究者の仕事はいつ果るともない。

土星を探ぐるボイジャー号の華やかな成果が報道されている今日、われわれの研究者達は、国尊の人間が生きる条件の、最も地味な研究に日々精魂を尽して意気旺んである。本年も又価値高い研究から明けることを寿ぐ。

* 池田悦治 (Etsuji IKEDA), 社団法人生産技術振興協会理事長